

元代の大都南城について

著者	渡辺 健哉
雑誌名	集刊東洋学
巻	82
ページ	103-121
発行年	1999-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132546

元代の大都南城について

はじめに

周知のように、長い歴史を有する中華人民共和国の「首都」北京の一大転機が、十三世紀元朝による大都の建設であつた。以来、北京は遊牧民族と農耕民族との接点に位置しながら、近世から現代に至るまで、中華世界全域の中心として存在し続けてきた。

元の大都に関しては、これまでも復原研究を中心として多くの研究蓄積があり、枚挙に遑がない¹⁾。しかしながら、これまでの研究が主たる対象としてきたものは、世祖クビライ（一二一五〜九四）によつて新たに建築された「大都」であり、その西南に隣接し、のちに明清北京城外城の西南部分にあたる、金代以来の中都南城は補足的にしか言及されてこなかつた（次頁地図参照）。

さらに、これまでの北京史研究においては「金の中都」「元

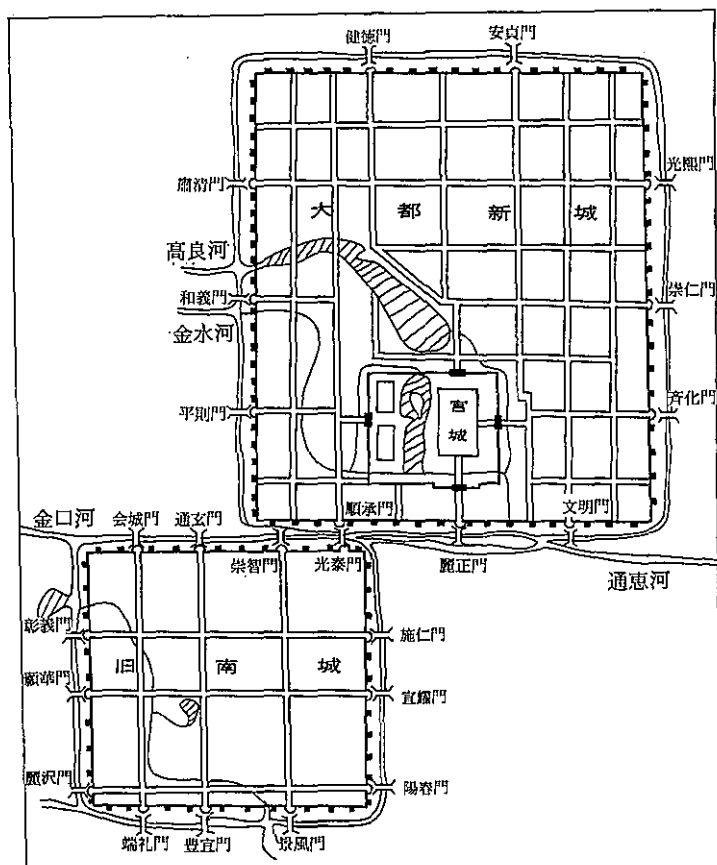
の大都」「明清の北京」というように、それぞれの王朝ごとに時代を画して検討する傾向が強かつた。しかし、これも各王朝の「首都」として北京の存在を捉えるだけならばそれで充分かもしれないが、どのようにして前王朝の「首都」を包摂して、新王朝の「首都」が形成されていくのか、というような北京形成史の観点からは不十分といえる²⁾。

本稿では元代の史料に「南城」「舊城」と表記される、元朝下における金代以来の中都城の都市空間にスポットを当てる。具体的には、大都城の建設前夜から、住民がそこへ移住するまで、中都城がどのような役割を果たし、どのような形で元末明初まで存在していくのかを、特にその大都に対する補完的機能に注目しつつ、解明していきたい。

なお本文中では、金代からの中都城を「南城」と表記すること、また「南城」「大都城」と表記した場合、それぞれ城壁に囲まれた当該の空間を指すことを予め断つておく。

渡 辺 健 哉

大都城と南城



王崗『北京通史』第五卷（中国書店、一九九五年）より（一部文字を改めた）

一 金の中都城の改造

まず結論から述べてしまえば、大都城が建設されるまでの仮の都である南城には、その後も多数の住民が居住し、その状態が元末まで継続する。史料上の制約があることは否めないが、先行研究ではこの南城についての言及があまりなされてこなかった。筆者は、この南城と新城である大都城の両城を、広域の「大都」として考えなくてはならないと思う。なぜなら、以下に述べるように大都城建設後も、南城に官署が置かれ、また実際に住民の居住がみられるからである。

南城は大都城西南に位置し、元朝の成立当初、世祖は中国支配の中心地としての機能をこの地に保持させようと思図していたと考えられる。ところがこれまでは、モンゴル軍による幾度かの攻撃によって金の中都城が荒廃していたために、その方針の変更を余儀なくされた、という見方があった。しかし、近年の牧野修二氏の研究によれば、金軍がモンゴル軍と防禦戦を行なったかどうかは定かではない、という。

そこではじめに、南城について完璧な破壊が行われたわけではないことを検証するために、モンゴル朝が金代の建築物を利用し、そのまま元朝に至っている例を見てみよう。

まず、国子学について、『元史』卷八十一、選舉志一、學校の條に、

國初、燕京始平、宣撫王楫（楫）請以金樞密院爲宣聖廟。太宗六年、設國子總教及提舉官、命貴臣子弟入學受業。……至元十三年……遂改爲大都路學、署曰提舉學校所。二十四年、既遷都北城、立國子學于國城之東、迺以南城國子學爲大都路學。

とある。「國初」の太宗五年（一二三三）、王楫の提案によって、金の樞密院が孔子を祀る宣聖廟となり、それが国子学に改められ、至元二十四年（一二八七）になると、すでに完成している大都城に、改めて国子学を建築したため、南城の国子学が大都路学になった、とある。ただし、『析津志輯佚』に「樞密院舊基を以て文廟に改建す」とあるように、樞密院の建築物をそのまま利用したわけではなく、その跡地が利用されたのであろう。

次いで、翰林国史院について考察する。翰林国史院の官署は至元元年（一二六四）九月に設置された。当然、その場所も中都城内であったと考えられ、歐陽玄（一二七三—一三五七）『圭齋文集』卷三、「漫題四絶」によれば、

翰林老屋勢深雄 猶是金家兀朮宮
定鼎初年曾作省 至今門徑鳳池通

とあり、場所の確定はできないが、元の翰林国史院は金の

太祖（一〇六八〜一二二二）の第四子である元朮（？〜一四八）の王府を改めたものだった。

最後に、中書省のオフィスについて考察する。まず、この官署の沿革を概括的に伝える、王惲「秋澗先生大全文集」巻八十、「中堂事記」上、中統元年十二月壬寅の條を掲げる。

燕省自來置廢、官西臺上、翼隘近市不稱具瞻。以移省事上聞、奉聖旨「遷四王府。其列聖神主奉安聖安寺瑞像前殿。」明年以樂善老故府爲省署、仍以金都省舊額榜焉。

中統元年（一二六〇）、官署移転の建議に対する世祖クビライの聖旨は、「四王府に遷せ。その列聖の神主は聖安寺の瑞像前殿に安置せよ。」というものであった。「四王」とは、金の世宗（一二三三〜八九）の第四子、永成（？〜一二〇四）のことである。この金代の「四王府」は、これ以前のチンギスカンによる中都攻略後、華北の実質的な統治者となる、ジャバル・ホジャに邸宅として賜与される。さらに、前引の「中堂事記」中の「明年」にあたる『元史』巻四、中統二年九月庚申朔の條によれば、

詔以忽突花宅爲中書省署。奉遷祖宗神主于聖安寺。

とあり、「忽突花宅」と「中堂事記」の「樂善老故府」とは同義と考えられ、ジャバル・ホジャから「忽突花」へ、その邸宅が移譲されたことを伺わせる。なお、この時期の中

書省がモンゴル政權における一出先機関としての、いわゆる行中書省であることはいうまでもない。

国子学の変遷をまとめれば、金代の枢密院址↓宣聖廟↓国子学↓大都路学となり、中書省の変遷をまとめれば、金の永成の王府↓ジャバル・ホジャ邸↓「忽突花」邸↓中書省、となる。わずかな例ではあるものの、金の中都の建築物は破壊されることなく、継続してモンゴル人王朝下、延いては世祖の下で使われていたことが分かる。そして大都城の建設によって、これらの官署はすべて新城に移転していく。

それでは、いよいよ南城の様子を見ていくことにする。まず、陳高華氏は『秋澗先生大全文集』巻十の七言古詩「革故謠」の後半部分から、至元二十五年（一二八八）に、南城の城壁が棄却されたことを述べ、多くがそれに依拠している。論拠となった「革故謠」をあらためて引用すれば、

……今年戊子冬十月 天氣未寒無雨雪

禁軍指顧舊築空 郊遂坦夷無壅隔……

とあり、確かに、禁軍が南城の城壁を指差すと、城壁はすでに取り壊され、大都城の郊外には広々とした空間が広がっている情景を詠んでいる。しかし、後述するように、最初に南城周囲の測量を行なっている事実から、城壁の全面的な棄却が実行されたとは考えられない。また、たとえば城

壁の棄却が実行されたとしても、それが直ちに都市機能の消失につながるということも考えにくい。そこで、具体的な姿は後述するとして、とりあえず南城が明初まで存在した事実を確認しておく。

まず、以下の『通制條格』からは、蟬集し、都市活動を営む人々の姿が窺える。

中統四年七月内、飲んで奉じたる聖旨には以下のようにある。『在京の権豪・勢要や、回回や漢兒の軍站・民匠・僧道、諸色人等が房舎を建築し、垣牆を築くこととて、公道を勝手に占拠しています。禁約してくださう。』という奏をうけた。今後、再び以前のように占拠させるな。もし違反すれば、すぐに街路を侵した垣牆や建築物は破壊し、さらに犯人を罪に処す。』と（聖旨に）あった。欽此。

この史料における「在京」は、中統四年（一二六三）段階であるから、南城のこと以外に考えられない。豪民等によって、擅に屋敷の拡張や垣根の設置が行われ、街路の不法占拠、いわゆる「侵街」現象の発生を確認できる。居住と「侵街」という事実から、通りに沿った商店街が形成され、活発な商業活動にまで及んでいた可能性を推測することもできよう。

また『大元聖政國朝典章』（以下『元典章』）は、実質的

な大都建設工事の開始年である、至元四年（一二六七）の正月に中都城内で発生した交通事故を伝える。この案件によれば、酒を飲んだ李三丑の操る騎馬が田快活という少年を憫忠寺の裏で跳ねとばしたということである。まず、事故現場である憫忠寺（現在の法源寺）は南城にあり、唐代からの名刹として知られていた。しかも、李三丑は友人の喬令史と共に「酒を賣る燕家の内にて」酒四瓶を買って一緒に飲んでいた、という。このことは、『析津志輯佚』古蹟（百七頁）の、「南城には、崇義樓・縣角樓・攪霧樓・遇仙樓という酒樓があつたが、今（元末）は廃れてしまった」という史料と共に、南城内は酒樓が存在し、賑やかな都市生活が営まれていたことを裏付ける。

そしてこの南城は、元朝最後の皇帝である順帝が北に逃げた後、明初まで存在していた。『明太祖實錄』卷三十四、洪武元年（一三六八）八月戊子の條に、

大將軍徐達遣右丞薛顯・參政傅友德・陸聚等將兵略大同、令指揮葉國珍計度北平南城。周圍凡五千三百二十八丈、南城故金時舊基也。

とあるように、大都攻略の総司令官徐達が南城の測量を行なわせている。前述した、城壕の棄却に疑問を抱くのはこの点からである。つまり、少なくとも測量を可能にさせた何らかの目印があつたと考えるべきで、城壁は完全に破壊

されたわけではなく、若干は残存していたと考えられる。因みに「五千三百二十八丈」は約十六kmで、一九五八年の城壁の調査概報によれば、約十八・七kmになるので、若干の縮小があったのかもしれない¹³⁾。とまれ、この史料からは、南城は金代の遺址であるという認識が明初まで貫かれ、既に完成された大都城とは別に元末まで存在していたことが分かる。以上のように、元朝一代を通じて一貫してこの街が存在していたという事実から、モンゴル軍と金軍との戦争で若干の破壊がなされたとしても、都市全体が完全な焦土と化したとは考えにくく、住民たちはたくましく復興を遂げたのである。

ではどのように南城が修理されて、人々が集められていくのであろうか。まず、中統二年（一二六一）になると、『元史』巻四、中統二年十月庚子の條に、

修燕京舊城。命平章政事趙璧・左三部尙書怯烈門率蒙古・漢軍駐燕京近郊・太行一帶、東至平滦、西控關陝、應有險阻、於附近民內選諳武事者、修立堡寨守禦。以河南屯田萬戶史權爲江漢大都督、依舊戍守。又選銳卒三千付史樞管領、於燕京近郊屯駐。

とあるように、その前年にアリク・ブガと帝位を争い大カーンの位に即いた世祖は、中都城周辺に精銳部隊を配置しつつ、金の宮城の修繕を始めた。周辺に軍隊を配置したのは、

アリク・ブガ一派や南宋政權に対する、帝都防衛という意図があつたからに他なるまい。さらに、宮城の修理とともに、南城に人を集めることを始める。『經世大典』の序文である、蘇天爵『國朝文類』巻四十二、工典總序、玉工には、
中統二年、敕徒和林・白八里及諸路金玉礪諸工三千餘戶於大都、立金玉局。

とあり、モンゴル人のアクセサリーを製作する、カラコルムやバイパリックの宝石細工職人が南城に集められた、という。この史料で「大都」とあるのは、『經世大典』が後世に編纂されたためであり、後述するように、後世の人が中都城を含めて「大都」と認識していたことの証左でもある。金の中都城を囲むように軍隊を配置しつつ、その内部に手工業職人を移住させたのである。さらに、翌中統三年になると、弘州の織物業の職人を南城に移住させている¹⁴⁾。

次いで至元元年（一二六四）八月になると、それまで、「燕京」と称していた南城を正式に「中都」と改称する。つまり「燕京」という一地名を、金代以来の京師を表す名称に変更することで、南城に京師としての重みを再び持たせた。これによって、南城は、先に夏都として定められた上都と対等の関係に昇格したのである。すなわち、この時点では、南城を正式な「首都」とする方針が世祖には存在していたと考えられる。

翌至元二年になると、『元史』卷六、至元二年正月癸酉の條に、

敕徙鎮海・百八里・謙謙州諸色匠戸於中都、給銀萬五千兩爲行費。又徙奴懷・忒木帶兒斡手匠八百名赴中都、造船運糧。

とあつて、チンカイ・バルガスン・バイバリック・ケムケムジュートの工芸職人、ヌハイとテムデルが管理していた砲手の移住があつた。元末の『山居新話』によれば、この謙謙州の住人の移住してきた場所が南城にあり、「謙州宮」と呼ばれていた。この史料で注目すべきは、武器製造職人の移住である。先行研究によれば、鎮海城や謙謙州にも武器職人がいたことで知られる。それ故、この「諸色匠戸」も武器職人と考えられる。このように、武器製造職人を一ヶ所に集住させた背景には、武器の製造や管理は国家にとつての重要問題のため、支配者の目が届くところに置かれるべき、という考えが働いたからであろう。大都城建設後の至元十六年（一二七九）三月に実施された、回回砲製造職人の新城大都への強制移住も、これと同じ論理によつてなされたと考えられる。ここからは世祖が南城を、少なくとも軍事上の重要拠点、と見做していたことが窺えるであろう。

このように、世祖は「勅」という手段によつて、官營工

業の職人たちを陸続と移住させるようになる。この様子をまとめて『國朝文類』卷四十二、工典總序、諸匠にある『經世大典』の序文は以下のように伝える。

國家初定中夏、制作有程、乃鳩天下之工、聚之京師、分類置局。以考其程度、而給之食、復其戸、使得以專於其藝。故我朝諸工制作精巧、咸勝往昔矣。

都に天下の工芸職人を集め、ノルマ達成の度合いを考慮して給料を与え、徭役免除の優遇措置を与えることで作業に専念させた、と。

また、世祖の廷臣達の居住地も南城に与えられた。元朝創世期、第一級の名臣に数えられる劉秉忠の邸宅は、至元年（一二六四）、南城北側の奉先坊に下賜された。また、やはり世祖期、権勢を強めることになるアフマッドの邸宅も、南城に置かれたようである。政治の中枢にいる人物達の居住する場所も南城であつたと考えられる。

ところが、世祖自身は、この都市の修築を行いつつも、城内に住むことはなかった。一見矛盾するようだが、杉山正明氏がすでに指摘されているように、世祖は至元年二月に、南城北郊の瓊華島にあつた金代の離宮、大寧宮の修繕を也黒迭児に命じており、そこに居を定めていたと考えられる。

以上、本章でみたように、世祖の居住空間は瓊華島の近

辺でありながら、南城改造と手工業職人の強制集住、都としての正式な名称「中都」の付与、といった事実からも分かるように、南城は金末元初の混乱によって完全な破壊を被ったわけではなかったし、そこを再び中国支配の中心にする計画が存在したと考えてよからう。至元三年（一二六六）十二月になると大都城の建設工事が開始される。そのため、至元三年までの暫定的措置と映るかもしれない。しかし、都市としての機能を保持し、金の中都から継続して人々の居住する都市が、新城大都の西南に存在する、という事実は元末まで残ったことになる。

二 大都城と中都城の併存期間における帝都の呼称

既述のように、至元三年をもって、大都城の建設工事が開始されるわけであるが、建設工事中は大都城と南城が併存している状況になる。ではその間、両都の呼称はいかなるものであったのだろうか。至元九年（一二七二）二月には「中都を改めて大都と爲す」という命令によって、これ以降、ひとまず「中都」という名称はなくなる。そこで、以下のような推論を立ててみたい。すなわち、至元十年前後まで、「中都」または「大都」とは建設途中の新城と南城の両方を包括して云っていた、と。まず、至元九年に魏初（一

二三二～一二九二）は、『青崖集』巻四、奏議において、以下のように述べる。

五月二十五日至二十六日、大都大雨、流潦瀰漫、居民室屋傾、圯溺壓人口、流沒財物・糧粟甚衆。通元門外金口黃浪如屋。……

とある。注目すべきは「通元（玄）門外」という表現である。「通玄門」は南城の北辺にある門で、大都城との連絡門になっていた。また「金口」とは金口運河のことで、まさに南城と大都城の間を流れていた（地図参照）。この史料によれば、「通玄門」の「外」側で「金口」が溢れかえっていたというのである。つまり、魏初の視点は南城からのものと見做すべきで、至元九年当時において、「大都」が南城をも含めて使われていたことが分かる。さらに続けて『元典章』の案件を掲げる。

至元十一年、兵刑部の符文に「五月十六日、省掾元仲明が受け取った都堂の鈞旨には『大都の街路には、ゴロツキやケンカをする者、跳神師婆ならびに夜聚曉散する者たちが沢山いる。兵刑部に仰せて文書を下して処罰させよ。それでももし相変わらず違犯したならば、跳神師人及び夜聚曉散の者たちを処罰するのは当然として、ゴロツキやケンカの衆については役に着かせよ。』と（都堂の鈞旨に）あった。兵刑部はそれはそれ

としてすぐに調べて、速かに榜を出して処罰せよ。もし違犯する者がいたならば、以上のように施行せよ」とあった。²⁷⁾

大都城への人口の急激な増加は、移住規定が公布される至元二十二年以降に生じると考えられるので、至元十一年（一二七四）という時期を考えると、やはりこの状況も南城での出来事と捉えられる。南城の街路上に、ゴロツキの類が徘徊し、官の目を盗みつつ、夜を徹して宗教集会をする輩がいた、という事実が垣間見える。

ところが、至元二十年（一二八三）に官署の移転規定、至元二十二年には官吏及び一般住民の移住規定が公布された。²⁸⁾ これまでも度々引用されている、有名な移住規定の条文であるが、あらためて掲げておく。

詔舊城居民之遷京城者、以貲高及居職者爲先、仍定制以地八畝爲一分、其或地過八畝及力不能作室者、皆不得冒據、聽民作室。

注目すべきは、自由な移住を許したのではなく、財産を持っている者と官吏であることが優先された点と、住宅を造る資力を持たない者の入城も許されなかった点である。つまり、ある程度の財産を持っていない者、官職に就いていない者はひとまず南城にとり残されたのである。この移住規定がいつ頃まで効力を発揮していたのか定かではないが、

官署の移転は元朝中期まで続いていたと考えられるので、一般庶民の自由な移住も移住規定の公布から二十年程待たねばならなかったのではないだろうか。ともかく、この二つの規定の公布を経てから、公文書においては、大都城と南城の区別が明確に行なわれるようになっていく。『元典章』に、至大元年（一二〇八）の中書省劄付に引かれた聖旨があり、そこには、

……又大徳四年（？月）初四日、受け取った聖旨に以下のようにある。「大都の中と旧城の中にいる人民は、いかなる人も、弾弓を造ってはいけない。また弾弓を所持してもいけない。このように宣諭したので、弾弓を造る者と弾弓を所持した者については、それぞれ杖七十七、杖八十七として、家財の半分を没収せよ。」とあった。欽此。²⁹⁾

とある。大都城と旧城の住民に対して、武器の製造と携帯を禁止しているわけだが、大徳四年（一二〇〇）になると、大都城と旧城（南城）とを明確に区別している。この区別が明らかになるには、当然の前提として、二つの都市が並存しなければならぬ。

さらに大都城と南城との区別が成立したことによって、公文書における南城内の住所は、明確にそれが識別できるように表記された。『宛署雜記』は延祐四年（一二二七）の

聖旨を引用するが、その碑文は南城にあった弘教普安寺の場所を「大都路南城開遠坊」と明記する。南城の住所について、「南城某坊」という表記が使われていた。

このように、元代の中期から後期にかけて公文書においては区別されていた南城と大都城とであるが、慣用的には区別されなかったと思われる。そのことを暗示する興味深い史料が『元朝秘史』である。この書は、本来モンゴル語によつて書かれていたが、明初の洪武年間に、本文を漢字によつて音訳し、その本文の横に「傍訳」と呼ばれる漢語逐語訳が付され、さらに、その直後に意味を要約したレジュメともいえる「総訳」が付された。⁽¹³⁾『元朝秘史』續集卷一のなかで、「中都」という語の傍訳に「大都」と付され、同じ部分の総訳では「北平」と書かれている箇所がある。つまり明代の史官は明らかに場所の違う「中都」と「大都」を混交し、さらにそこを包摂する都市が「北平」である、という認識をしていたことになる。公文書や住所のように明確に区別せねばならない場合を除いて、明初の人にとつてもこの二つの都市は不可分なものであったと考えられる。

三 その後の南城

では次に、南城の具体的な機能や役割を以下にみていく。

まず、南城は江南人が大都に上京した際、最初に入城する場所であった。南宋降伏後の至元十三年（一二七六）、南宋の使者が北上した際の記録に、嚴光大「祈請使行程記」という日記体の史料がある。それによれば、南宋の使者は南城東南の陽春門より入城し（地図参照）、当時、会同館として使用されていた、前述の「四大王府」に宿泊している。また使者たちは、大都城の麗正門を経由して、城内にあった枢密院に出頭することもあった。逆に、『秘書監志』卷三「廊宇」、至元二十三年三月七日の上奏によれば、大都城に住んでいながら、職務のために南城に通う者もいた。大都城と南城は、いわば通勤圏内にあった。

また、南宋の士大夫である謝枋得は、大都に連行されるものの、亡宋への忠義を尽くすため、元に仕えることを潔しとはせず、大都に到着して絶食を行い、至元二十六年（一二八九）四月に亡くなる。彼の幽閉された場所が前述の交通事故の現場、憫忠寺である。⁽¹⁴⁾このように、南城は旧南宋の漢人に向かって開かれた都市であったということもいえるよう。

さて、南城は元朝期を通じて、行楽地の側面を持っていた。そのことを端的に物語る史料が、虞集「道園學古錄」卷五、「游長春宮詩序」にある。

國朝初作大都於燕京北東、大遷民實之。燕城廢、惟浮

屠老子宮得不毀。亦其侈麗瑰偉有足以憑依而自久。是故迨今二十餘年、京師民物日以阜繁、而祭時游觀尤以故城爲盛。

財産制限による移住によつて、燕城（南城）に残つたのは仏寺と道観だけであるといい、商業的にも繁栄し始めた「大都」の中で南城が行楽地として性格を変えていく様子について述べる。「大ひに民を遷し之（大都）を實たす。」とあるが、前述の移住規定からも分かるように、移住したのは主に官僚層で、彼らが居なくなつたことをもつて「廢れた」と表現しているのであり、大多数の一般庶民は南城に取り残されてゐたと推測される。宗教建築物についてさらに付言すると、『析津志輯佚』や『大元一統志』等の寺觀の項を繙いてみれば、元末に至るまで多くの寺觀が南城にも存在してゐたことを確認できる。この宗教施設には宗教行事のため定期的に人が集まり、「廟市」が行なわれてゐた。元の大都で、如上の「廟市」の事例を見出だすことは難しいが、『析津志輯佚』歳紀（二百十四頁）は、大都の西、西鎮国寺で行なわれる「大法会」の際に、境内で南北二城より商人が集まつて、商売が行なわれたことを伝える。西鎮国寺の「廟市」は臨時的なものとして挙げられるべきであろうが、寺觀を中心とした商業空間が南城にも存在したことを想像できよう。

このような行楽地南城の様子をより具体的に知らせてくれるのは、多くの觀光スポットを詠み込んでいる詩歌である。迺賢（一三〇九？）『金臺集』卷二「南城詠古十六首序」には、

至正十一年秋八月既望、太史宇文公・太常危公、偕燕人梁處士九思・臨川黃君殷士・四明道士王盧齋・新進士朱夢炎與余、凡七人、聯轡出遊燕城、覽故宮之遺蹟。凡其城中塔廟・樓觀・臺榭・園亭、莫不徘徊瞻眺、拭其殘碑斷柱、爲之一讀、指廢興而論之。

とある。元末の至正十一年（一三五二）、非漢族である迺賢が友人と誘ひ合わせて、南城へピクニックに出掛ける。元末になると、「其の殘碑・斷柱を拭ふ」とあるように、すでに金の故宮の建物も荒廢が目立ってきたようではあるが、相変わらず行楽地であつた。この序文の後、「黄金臺」から始まる十六カ所の下で五言律詩を詠んでいる。他にも、文人達が南城の様子を詩に詠み込む例はしばしば見ることが出来る。

このことは、大都城に居住する官僚や文人の、遊興のための別荘が南城を中心とした空間に存在していたことも関係するであろう。明代北京の遺事を記録した孫承澤（一五九二―一六七六）は、『春明夢餘錄』卷六十四、名蹟一で以下のように述べる。

今右安門外西南、泉源湧出、爲草橋河。接連豐臺、爲京師養花之所。元人廉左丞之萬柳園・趙參謀之匏瓜亭・栗院使之玩芳亭・張九思之遂初堂、皆在於此。

明代の右安門は南城東南の開陽東坊と開陽西坊の間に位置する。別荘の全てが南城内にあったわけではないが、大都城の西郊と南郊にそれらが点在していたとみられる。この空間が風致地区となったのは、水が湧出するという実質的な理由に加えて、既述のように、大都城西南にある行樂地南城がその中心にあったことも無関係ではあるまい。

また、年中行事について『析津志輯佚』歳紀（二百十六頁）を見れば、

是月（二月）也、北城官員・士庶婦人女子、多遊南城、愛其風日清美而往之、名曰踏青・鬪草。若海子上、車馬雜沓、繡轂・金鞍・珠玉璀璨。人樂昇平之治、官無風埃之虞。政簡吏清、家給人足、亦莫盛於武宗・成宗・仁宗之世。

とある。北城（大都城）に居住する役人や士庶の婦女子達は、待ち望んでいた春の訪れを楽しむかのように、南城で摘み草遊びに興じた。

以上のように、行樂地としての性格の強い、南城ではあるが、元末まで確実に人間、特に一般庶民が居住していた。大都において警察の役割を担うのが南北兵馬司で、兵馬司

は南城と大都城のそれぞれに置かれ、帝都内のパトロールと盗人の逮捕を司った⁽⁸⁾。ここで警察官の任に当たるのが弓手である。この弓手について、『元史』巻一百一、兵志四、弓手の條には、

（至元）十六年、分大都南北兩城兵馬司、各主捕盜之任。南城三十二處、弓手一千四百名。北城一十七處、弓手七百九十五名。

とある。すでに、兵馬司は至元七年の時点で「中都兵馬司」として存在していた⁽⁹⁾。当然、南城に置かれたと推測され、南城に設置されていた兵馬司を、移住規定を定めるよりも前に南北に分割していることから、この後も、元朝が南城を放棄する意志を持たなかったことが窺える。そして、南城には三十二カ所の分署に千四百名の弓手、北城には南城のほぼ半分にあたる、十七カ所の分署に七百九十五名の弓手がいたことを伝え、さらに南城・北城の分署には、それぞれ一ヶ所当り四十五人前後の弓手を擁していたことが分かる。警備する人間が多いということは、それに比例して警備や管理の対象とされる人間が多かったということになり、この時点では南城に居住する人間のほうがまだ多かったことが窺える。しかも、その住民は官僚層や軍隊より、警察によって管理されるような一般民衆のほうが多く居住していたと考えられる。

また、至元年間に公開処刑が行われた場所も大都城内ではなく、南城を中心とした空間であった。「正氣の歌」で有名な文天祥は、南宋滅亡後に各地を点々として、最終的には囚われて、至元十六年（一二七九）に大都に護送される。至元十九年（一二八二）になって、この文天祥が処刑された場所は、『秋澗先生大全文集』巻九十七、「玉堂嘉話」巻五に、

……執文天祥至大都。囚之、上屢欲赦出相之、竟不從。

十九年十二月初九日、戮於燕南城柴市。

とあるように、南城の柴市であった。また、同年に大都城の宮城前で暗殺されたアフマツドも、死後その悪政が露見し、遺体を南城の北門である通玄門の外に曝された。祝祭の一種である公開処刑をより効果的に行なおうとすれば、いきおい日常的に多くの人が往来する城門、乃至は居住者以外にも民衆が集中する市場などで行なうことになる。実際、文天祥が処刑場に連行される時も、見物人が「堵の如し」であったという。文天祥とアフマツドに対する見物人の意識はそれぞれ違うであろうが、支配者側には、それを人口の多いところで見せようという意識が、両件に共通して存在していたのであろう。その場所こそが南城であった。さて、前述したように、一般庶民が大都城に入るには財産の多寡による入城制限が設けられたため、南城には新城

に移ることのできない人が多く残り、徐々にダウンタウンと化していく。政府からの救済措置である賑恤策について見てみよう。まず、『元史』巻九十六、食貨志四、賑恤によれば、

京師賑糶之制 至元二十二年始行。其法、於京城・南城設鋪各三所、分遣官吏、發海運之糧、減其市直以賑糶焉。凡白米每石減鈔五兩、南粳米減鈔三兩、歲以爲常。

南城にも大都城と同様に賑恤策がなされている。さらに、順帝の至元三年（一三三七）から四年（一三三八）にかけて、大都の周辺では水災や地震が頻発して、政府から屢々賑恤策が施されるが、『元史』巻三十九に、

（至元三年）正月戊申、大都南北兩城設賑糶米鋪二十處。
三月己未、大都饑、命於南北兩城賑糶糴米。
九月丙寅、大都南北兩城添設賑糶米鋪五十處。
所。

（至元四年）十二月甲午、大都南城等處設米鋪二十、每鋪日糶米五十石、以濟貧民、俟秋成乃罷。
とあるように、大都城に賑恤が施されるだけでなく南城でもそれが実施されている。至元四年の対策は、「南城等」と表記されていることから、南城だけにそれが施されたわけではなからうが、南城を重視して賑恤が施された可能性は

ある。つまり、元末に至るまで政府から南城が無視されるということとはなかった。

この南城も、元末に至ると政治上の混乱に否応もなく巻き込まれていく。前掲『析津志輯佚』の最後の「亦た武宗・成宗・仁宗の世より盛んなること莫し。」という一節がそのことを極めて強く暗示している。成宗（テムル）、武宗（カイシャン）そして仁宗（アユルバルワダ）以降、元廷は大混乱を迎える。すなわち、仁宗の次の英宗から元朝最後の皇帝順帝まで、わずか十三年の間に七人の皇帝が帝位に即くという異常事態に陥るのである。前述した年中行事も平穩な時でこそ行なわれたのであり、仁宗以後、混乱は政治レベルに止まらず、大都の日常生活にも確実にその影が忍び寄っていたことが窺える。とくに、泰定帝（在位・一三二三年～一三二八年）死後の後継争いは、一般に天暦の内乱とよばれ、後継者が上都派と大都派に分裂し、大都城の西北にあつて交通の要衝である、居庸関を挟んで武力衝突にまで発展した。この時上都に構えていた反皇帝派は、忽剌台を先頭にして「南城」から大都に侵入を図ろうとした。混乱は一般民衆の居住していた南城にまで及んでいたのである。^⑧

以上のように、大都城の建設中は、中都城からの移行や移転がスムーズに行われたわけではなかった。時を経て、大

都城が完成されると、財産制限をとまなう移住規定によって、少なくとも至元年間は、南城と新城では住み分けが促進された。そのため、南城では庶民的な生活が展開される一方、新城では色目人などによる国際色豊かな生活文化が花開き、元朝政権に関わるあらゆる政治の舞台となっていた。しかし、財産制限上の住み分けが行なわれたとはいえ、これまで見てきたように、この二つの都市は完全な分離を見せたわけではなかった。南城の行楽地化は、官員の多数居住する新城にとつて補完的な機能を担わせ、南城と新城の交流をより一層促したのである。そして、行楽地と化していくとはいえ、南城に人間の居住する状況は元末まで続き、明代に入ると、それが明清北京城の外城に包摂されていくのである。

おわりに

本稿において確認してきたように、元代を通じ、一貫して大都城の西南には金代以来の中都城が明初まで存在し、両城は一体となり、「大都」の都市空間を形成していた。さらに、この都市空間が明代における北京城の内城・外城に受け継がれ、現今北京の祖型となっていく。これまでの研究では、「狭義の大都」ともいうべき、新城である大都城に

のみスポットが当てられてきた。しかし、西南に旧市街を抱え、二つの正方形を含めた「いびつ」な形こそ「大都」と考へるべきではないだろうか。この「広義の大都」という観点から見れば、庶民が居住し、大都城の人々にとっては行楽地である南城の歴史というものも、無視できぬ存在と思われる。杉山正明氏は、「まったくの『さら地』に、いわばゼロからつくられた純計画都市」という表現で、均整の取れた都市、大都城を論じる。しかしながら、その西南に存在し、元末まで運命を共にする南城の存在があつて、大都城が存在するという見方も、如上の検討からすれば許容されるであらう。

南城という、大都城の補完的機能を有する重要な都市を、ほぼ等閑視してきた理由は、各王朝毎に歴史的都市を考究する方向性のために他なるまい。しかしながら、支配民族の交替とともに、名称や位置が変わることがあるとはいへ、そこで日常生活を送る住民の意識に決定的な変化が生じるとは考えにくい。このような観点から本稿では南城を取り上げたのである。また、「金の中都」から「元の大都」への変遷を考察する上で、そこに「南城」を置いて考えることは、元朝がモンゴルの要素だけでなく、遼金の流れをも汲んでいることの再確認にも繋がるであらう。

本稿では、南城が元末まで存在する、という事実を確認

するのに止まった。では、このような南城がありながら、何故クビライは新城大都の建設に着手したのであるうか。また、新城大都の建設後、中都城から大都城への首都機能の移転はどのように進んだのであろうか。別稿での考察に譲りたい。

注

- (1) 大都に関する先行研究の全てを挙げることは紙幅の都合上できない。ただ幾編かの代表的な論考だけを列挙しておく。愛宕松男「元の大都」(『歴史教育』第十四卷第十二号、一九六六年、のち『同東洋史学論集』第四卷「元朝史」三二書房、一九八八年所収)。陳高華「元大都」(北京出版社、一九八二年。のち佐竹靖彦氏により「元の大都——マルコポーロ時代の北京——」中公新書、一九八四年、として訳出)。杉山正明「クビライと大都」(『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、一九八四年所収)。ただし、これら、諸先学が南城をまったく無視してきたわけではない。本文でも述べたように、「主たる対象として」大都城の研究が進められてきたのであるから、本稿が先学の理解する南城の姿を超えるものではない。大都に関してはさらに多くの研究があるが、それらについては稿を改めて紹介したい。また、金の中都に関しては于傑・于光度「金中都」(北京出版社、一九八九年)がある。

(2) 本稿を草するにあたって、特に啓発を受けた論考を紹介

しておく。羽田正「一六七六年のイスファハーン——都市景観復元の試み——」(『東洋文化研究所紀要』第百十八冊、一九九二年)である。該考では十七世紀の旅行家シャルダンの記録を元に、当時のイスファハーンが旧市街と新市街との二重構造を持っていたことを論じる。本稿で論じる、二つの隣接する都市について述べている点が興味深い。

- (3) 牧野修二「チングス汗の金国侵攻(その4)」(『愛媛大学法文学部論集文学科編』第二十三号、一九九〇年)「四 中都攻防戦」を参照。

- (4) 「国初」は、『析津志輯佚』学校(百九十七頁)によれば、太宗五年(一二三三)のことである。なお、『析津志輯佚』(北京図書館善本組輯、北京古籍出版社、一九八三年)は、『析津志』の佚文を『目下舊聞考』、『永樂大典』、『永樂大典』所引の『順天府志』、『徐氏辨字齋鈔本』から、北京図書館善本組が集めたものである。ただし、『析津志』は元末に編纂されたため、『析津志輯佚』の伝える大都の姿が、元末のものであることは、特に注意しておきたい。

- (5) 『元史』巻五、至元元年九月壬申朔の條、及び同巻八十七、百官志三「翰林兼國史院」。

- (6) 『元史』巻百二十、札八兒火者傳に「授黃河以北・鐵門以南天下都達魯花赤、賜養老一百戶、并四王府爲居第。」とある。

- (7) 中書省官署の移転については、張帆『元代宰相制度研究』(北京大学出版社、一九九七年二十七頁)を参照。ただし、張帆氏は「四王」を「元朮」とするが、筆者は本文中で述べた

ように、豫王永成と考える。なぜなら、劉祁「歸潛志」巻一に「豫王允中、世宗第四子也。好文善歌詩、有樂善老人集行於世。」とあり、『金史』巻八十五、豫王永成傳によれば、自らを「樂善居士」と称していたからである。なお、張帆氏は「忽突花」を、チングスカンの母に養われその義弟となつた、シギフトウク(失吉忽都忽)とする。

- (8) 前掲、陳高華「元大都」(六十七頁)を参照。

- (9) 「通制條格」巻二十七、雜令「侵占官街」。

中統四年七月内、欽奉聖旨「在京權豪・勢要、回回・漢兒軍站・民匠、僧道、諸色人等、起蓋房舍、修築垣牆、因而侵占官街。乞禁約事。」准奏。今後、再不得似前侵占。如違、即便將侵街垣牆房屋折毀、仍將犯人斷罪。」欽此。

- (10) 豪民については、中央政府や地方官衙と結びついて、地域社会に絶大な影響力を行使する存在、という植松正氏の理解を参考した。「元代江南の地方官任用について」(『法制史研究』第三十八号、一九八九年、のち『元代江南政治社会史研究』汲古書院、一九九七年所収)を参照。

- (11) 侵街については、木田知生「宋代の都市研究をめぐる諸問題——国都開封を中心として——」(『東洋史研究』第三十七巻第二号、一九七八年)を参照。

- (12) 『元典章』巻四十二、刑部四、過失殺「走馬撞死人」。この判例の供述書の部分は吉川幸次郎氏が元代における口語の例として紹介している。また岡本敬司氏はこの判例を手掛かりに交通事故の罰則について考察している。吉川幸次郎「元典章」に見えた漢文吏牘の文体」(『東方學報(京都)』

第二十四冊、一九五四年、のち『同全集』第十五卷、筑摩書房、一九六九年所収、及び岡本敬司「元代の交通事故」(『山崎先生退官記念 東洋史学論集』大安、一九六七年所収)を参照。

(13) 酒樓について。酒賢『金臺集』卷二、南城詠古「壽安殿」の自注に「殿基今爲酒家壽安樓」とあり、元末の南城にも酒樓があったことを伝える。

(14) 中都の周回数に閻文儒「金中都」(『文物』一九五九年第九期)に拠った。

(15) 近年、杉山正明氏は『經世大典』を天曆二年(一二二九)八月に即位した文宗トク・テムルの即位記念刊行物とよべるもの、という説を提示された。杉山正明『モンゴル帝国の興亡(下)』(講談社現代新書、一九九六年)二百十三頁を参照。

(16) 「バイバリック」は至徳二年(七五七)にウイグルの葛勒カガンによって、セレンゲ川流域に建設された都市である。詳しくは、田坂興道「漠北時代に於ける回紇の諸城郭に就いて」(『蒙古學報』第二号、一九四四年)を参照。また、森安孝夫・オチル(編)『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』(中央ユーラシア学研究会、一九九九年)「バイバリク遺蹟」(百九十六頁)松田孝一執筆部分もこの史料について言及している。

(17) 『元史』卷五、中統三年三月辛酉の條。なお、弘州はこれ以前、太宗即位(一二三四)後に、鎮海によって織物業の職人がサマルカンドや開封から強制移住させられた地である。

る。『元史』卷百二十、鎮海傳。弘州の地理的考証等については、愛宕松男「マルコポーロ旅行記地名考訂(II)——腹裏の三地 Ydhu, Cachar Modun, Singiu Matu——」(『集刊東洋學』第十四号、一九六五年、のち『同論集』第五卷「東西交渉史」三一書房、一九八九年所収)を参照。

(18) 『元史』卷五、中統五年(至元元年)八月乙卯(十四日)の條に「詔改燕京爲中都、其大興府仍舊。」とある。正式な詔は『元典章』卷一、詔令一、建國都詔に詳しい。ちなみに、この詔は元号を「至元」と改元する二日前のことである。なお、上都はその前年に、開平府から上都と正式に定められている。『元史』卷五、中統四年五月戊子の條。

(19) それぞれの地の特徴については以下の研究を参考にした。大葉昇一「モンゴル帝国Ⅱ元朝の稱海屯田について」(『史観』第一〇六冊、一九八二年)、韓儒林「元代的吉利吉思及其隣近諸部」(『穹廬集』上海人民出版社、一九八二年)。また「奴懷・忒木帶兒」について考察しておく。先ず、「忒木帶兒」は『元史』卷百二十二に立伝されている「忒木海」の子供である「忒木臺兒」のことであろう。この一家は代々砲手を管理することになる。「奴懷」は『元史』卷四、中統二年十月壬辰の條に「救火兒赤奴懷率所部略地淮西。」とあることから、「火兒赤(コルチ)Ⅱ箭筒士」というケシクを担った「奴懷」という人物であることが確認できる。中華書局標点本はこの「火兒赤」を固有名詞にしているが、採らない。

(20) 楊禹「山居新話」に「……緜緜州、即今南城緜州營、是

其子孫也。」とある。

(21) 『元史』卷十、至元十六年三月壬子の條。

(22) 『元史』卷百五十七、劉秉忠傳。

(23) マルコ・ポーロ・愛宕松男訳注『東方見聞録 1』(平凡社東洋文庫、一九七〇年)二百十六頁を参照。

(24) 『元史』卷五、中統四年三月庚子の條、及び至元元年二月壬子の條。

(25) 『元史』卷六、至元三年十二月丁亥の條。

(26) 『元史』卷七、至元九年二月壬辰の條。

(27) 『元典章』卷五十七、刑部十九、禁聚衆「禁跳神師婆」。

至元十一年、中書兵刑部。「五月十六日、省掾元仲明傳奉都堂鈞旨。『大都街上、多有潑皮厮打底、跳神師婆并夜聚曉散底。仰本部行文字禁斷。如是依前違犯、除將跳神師人并夜聚曉散人等治罪外、據潑皮厮打的發付着役施行。』省部除外、合下仰照驗、速爲嚴行出榜禁治。如有違犯人等、依上治罪施行。」

(28) 夜聚曉散については、宮崎市定「宋代における殺人祭鬼の習俗について」(『中国学誌』第七号、一九七三年、のち『同全集』第十卷「宋」岩波書店、一九九二年所収)、笠沙雅章「喫菜事魔について」(『青山博士古稀記念 宋代史論叢』同刊行会、一九七四年、のち『中国仏教社会史研究』同朋舎、一九八二年所収)を参照。

(29) 移転規定については、『元史』卷十二、至元二十年九月丙寅の條。移住規定については、同卷十三、至元二十二年二月壬戌の條。

(30) 『秘書監志』卷三「靡宇」によれば、至大元年(一三〇八)六月十六日に秘書監の官署の移転の最終許可が出されている。

(31) 『元典章』卷三十五、兵部二、軍器拘収「禁治弓箭彈弓」……又於大德四年初四日、傳奉聖旨「大都裏、舊城裏有的百姓每、不揀是誰、休造彈弓者。也休拿彈弓者。這般宣諭了、造彈弓的拿彈弓的打七十七、八十七。斷沒一半家私者」聖旨了也。欽此。

(32) 沈榜「宛署雜記」卷二十、志遺七、遺事に「元碑聖旨 京城外西十里白福紙坊弘教寺元碑一、碑云……屬大都路南城開遠坊裏有的廉福奴左丞相的花園買要了、那田地裏起蓋弘教普安寺。麼道、執把的聖旨與了也。……虎兒年(一二二七)十一月二十八日、大都有時分寫來。」とある。なお開遠坊は南城の北側にあった。

(33) 小林高四郎「元朝秘史の研究」(日本学術振興会、一九五四年)第七章「元朝秘史漢字音訳の年代」を参照。これによれば、洪武十五年を境として、その後どちらかに成立年代を設定するかで、見解が分かれているものの、漢字音訳の年代が洪武年間であることは共通している。ちなみに、小林氏は洪武二十二年(三十一)年の間のこととする。最新の研究である小沢重男「元朝秘史」(岩波新書、一九九四年)によれば、卷一・卷二は洪武十五年、卷三以後の諸卷は洪武二十二年(三十一)年の間に漢字音写がなされたとする。

(34) 劉一清「錢塘遺事」卷九、「祈請使行程記」閏三月十日(四月十二日)。

(35) 『宋史』卷四百二十五、謝枋得傳。及び陶宗儀『南村輟耕錄』卷二、不食死。

(36) 宗教行事の際に出される市を「廟市」という。「廟市」については、斯波義信氏に宋代江南の、全漢昇氏に宋の開封と明清の北京を扱った研究がある。斯波義信『宋代商業史研究』(風間書房、一九六八年)第四章第二節「二 宋代江南の廟市」、及び全漢昇『中國廟市之史的考証』(『食貨』半月刊一卷二期、一九三四年)を参照。

(37) 中村淳『元代法旨に見える歴代帝師の居所——大都の花園大寺と大護国仁王寺——』(『待兼山論叢』史学二十七号、一九九三年)によれば、この西鎮国寺は大護国仁王寺のことであるという。

(38) 『元史』卷九十、百官志六「大都路都總管府、大都路兵馬都指揮使司」、及び同卷一百三、刑法志二、職制下。

(39) 『元典章』卷五十七、刑部十九、諸禁、賞捕私宰牛馬。これによれば、至元七年十二月段階において「中都兵馬司」の存在を確認できる。

(40) 前掲、于傑・于光度『金中都』(二百二十頁)によれば、この「柴市」が、清代の処刑場「菜市口」近辺に当たるといふ。なお、『析津志輯佚』城池街市(六頁)は、南城内の市場として、大悲閣の周囲に、「南城市、窮漢市、蒸餅市、臘粉市」という市場があったことを伝える。これらは、遼金以来の市場でもある。

(41) 『元史』卷二百五、阿合馬傳に、「乃命發墓剖棺、戮尸于通玄門外、縱犬啗其肉。百官士庶、聚觀稱快。」とある。

(42) 『文山先生全集』卷十九、劉岳申「文丞相傳」。相田洋「異人と市——境界の中國古代史——」(『研文出版』一九九七年)第一部第三章「市と処刑」によれば、公開処刑は民衆にとつては、威嚇というだけでなく、「祭」であったという。また、妹尾達彦「唐代長安の盛り場(中)」(『史流』三十号、一九八九年)は唐代長安における棄市について論じたものである。

(43) 『元史』卷三十二、致和元年十月癸巳の條、及び同卷百三十八、燕鐵木兒傳。

(44) この主張は杉山正明氏による近刊の概説書で繰り返しながらなされているが、ここでは取り敢えず、『クビライの挑戦』(朝日新聞社、一九九五年)百四十三頁〜百五十六頁を参照。

(45) 植松正「元初の法制に関する一考察——とくに金制との関連について——」(『東洋史研究』第四十卷第一号、一九八一年)は、元初の法令が金から繼承されたものであることを明らかにし、金元の連続面を指摘している。